

## 店も顧客も喪失、ゼロから始める経営再建

廃業か再建か。仮設商店街の店主たちはこの 4 年間、何度も岐路に立たされてきました。顧客だった地域住民は被災で散り散りになり人口も減少。加えて資金や後継者の問題などもあり、「再建して果たしてうまくいくのか…」。将来への不安と希望のあいだで揺れ動く日々を送ってきたのです。

2014 年 10 月、気仙沼市の「鹿折復興マルシェ」が、嵩上げ工事のため元の場所から移転し再オープンしました。ただしそこも区画整理事業のため 2016 年 8 月末には閉鎖になります。

他の仮設商店街でも、「しおがま・みなと復興市場」が 2016 年 8 月末まで、「南三陸町さんさん商店街」が 2016 年 11 月末までと存続期限が決まっており、復興事業の進展の中で店主たちは新たな決断を迫られています。

山元町合戦原の仮設商工施設で理容室を営む辻憲子さんは、新市街地に店舗兼住宅を建て営業を再開する予定です。「土地の引き渡しは今年 9 月、店舗の完成はその先だからまだまだ時間がかかりますね」。

震災後の住民離散で、辻さんの店も大勢の顧客を失いました。仮設商工施設への入店後は、隣接する仮設住宅からの来店客が増えましたが、新市街地へ移転すればそれもまた変わります。

固定客相手の商いであるはずなのにその顧客は、いまま流動的な状態が続きます。「新市街地も、以前住んでいた地区とは大きく環境が変わるので不安ですよ」。

店も顧客も失い、マイナスから出発した店主たちにとって、本格再建は決してゴールではなく、ようやくゼロ地点に立ったようなもの。1 年後、2 年後の本格再建で再び経営の試練と向き合うことになるのです。



▲（写真 1）辻憲子さん。店舗再建費用の 75% は補助金で、残りは自己資金です。「土地も住む家も買わなきゃならない。娘夫婦はいますが返済はやはり重たいですよ」とお孫さんの顔を見ながら。



▲（写真 2）辻さんの理容室のほか美容室、漬物工房、塾、飲食店、卸倉庫など 6 店舗が向い合せに並ぶ合戦原地区の仮設商工施設。